はじめに

２０２３年10月７日。ユダヤ教徒の安息日である土曜日の朝、防弾チョッキをつけ、自動小銃を構えた私服姿の集団がイスラエル南部の町を襲った。その場面を記録した街角や農場の監視カメラには、銃を連射しながら血だらけのシャツの若者を連行する姿や、乗用車の横で倒れて足を動かしている男性に向けて銃を撃って走り去る場面が映っていた。

米国公共放送サービス（ＰＢＳ）のテレビで放映されたのは、パレスチナ自治区ガザを拠点とするイスラム組織「ハマス」の武装メンバーがイスラエル南部で開かれていた音楽イベントを襲撃するシーンである。

このイベントは前日の金曜夕方から夜を徹して行われ、数千人が参加していた。７日午前６時過ぎに襲撃が始まり、２６０人が殺害され、かなりの人数が連行されたという。襲撃の時、近くの藪（やぶ）の中に逃げて７時間隠れていたという若者は、兄弟を殺害されたと語った。彼は政府の予備役の召集に応じると続け、「復讐（ふくしゅう）しなければならない。ガザという地名は地図から消えるだろう」と語った。

イスラエルは「国内の死者は１４００人（のちに約１２００人と修正）、連行された人質は２４０人を超える」と発表した。３０００人を超えるハマス戦士による越境攻撃について、インターネットに登場したハマスのスポークスマンは「アルアクサー洪水作戦は、いままさにいくつもの方面で英雄的な戦いを継続中である。ジハード（聖戦）には勝利か殉教しかない」との声明を出した。

私は新聞社の中東特派員として、１９９４年からガザ自治区を数え切れないほど訪れている。地中海に面した41キロの海岸線に沿った、奥行き6キロから12キロの平らで細長い場所である。ガザの人々は私のような外国人ジャーナリストの取材にも快く答えてくれる。厳しい状況に置かれているのに、なぜ、こんなにこだわりなくよそ者を受け入れることができるのだろう、と行くたびに思う。それはガザが古代からエジプトとシリアをつなぐ交通の要所であり、古代のアレクサンダー大王も、近代のナポレオンも通った場所でもあり、人や文明が行きかってきた歴史があるからであろう。

そんなガザの若者たちがイスラエルの市民に非情な暴力をふるうのを見るのは、私にとってつらいことだった。しかし、何がガザの若者たちを悲惨な暴力に駆り立てたのか。そう考える

時、パレスチナ人が１９６７年以来、半世紀以上にわたってイスラエルの軍事占領という暴力のもとに、特にガザは２００７年から非人道的な封鎖下に置かれ、「天井のない監獄」と呼ばれる状況に閉じ込められてきたことを考えないわけにはいかない。何もないところから暴力が生まれるわけではないのである。

イスラエルメディアはハマスの越境攻撃を、１９７３年10月６日の第４次中東戦争の緒戦の敗北にたとえた。エジプト軍がスエズ運河を渡って奇襲をかけ、当時イスラエルが占領していたシナイ半島にいたイスラエル軍が撃破され、イスラエル政府は核兵器の使用さえ検討したとされる。その時と同様の最大の危機の再来ととらえたのである。

越境攻撃の後、イスラエル首相のネタニヤフは正式に「宣戦布告」を行った。治安閣議の中で「敵にすさまじい代償を払わせる」と述べ、「ハマス殲滅（せんめつ）」を掲げた。国防相のガラントは「ヒューマン・アニマルとの戦い」とパレスチナ人の人間性を否定するような言葉を発し、連日、激しい空爆を始めた。10月下旬には部分的に地上戦も始まり、ハマスの越境攻撃から８か月後の２０２４年６月７日時点でガザのパレスチナ人の死者は約３万７０００人に達した。そのうちの１万５０００人が子供という惨状となり、国連人権委員会の特別報告官が、連名で「ジェノサイド（集団殺害）を阻止するために即時停戦が必要」と呼びかける事態となった。

10月7日の越境攻撃によって、ハマスの名前はアルカイダや「イスラム国（ＩＳ）」並みに知られるようになった。毎日のように日本の新聞、テレビでガザ情勢が報じられているが、ハマスは「ガザの地下にトンネルをめぐらして、イスラエル軍に対抗する武装組織」というだけで、その実態はほとんど知られておらず、掘り下げられることもなかった。

私はこのようなメディアの報道に不満と疑問を持った。私は１９９４年に朝日新聞社のカイロ駐在特派員となり、イスラエルとＰＬＯ（パレスチナ解放機構）との間で93年に調印された歴史的な和平合意「パレスチナ暫定自治協定（オスロ合意）」が、94年5月からガザとヨルダン川西岸で実施され、パレスチナ自治の始まりを取材した。２００１年からはエルサレム駐在となり、その前年に始まった第2次インティファーダ（民衆蜂起）の中で、和平の希望が日々、崩れていくのを目のあたりにすることになった。

ハマスはオスロ合意に反対する立場で、イスラエル・パレスチナ問題のいろいろな側面で関わっていたことから、１９９４年以来私は、様々な局面で取材した。２００１年には、ハマスの創設者で精神的指導者だったアフマド・ヤシーンにインタビューしたこともある。90年代のハマスは「オスロ合意」に反対し、特に「自爆テロ＝殉教作戦」という手法をとってきたため

パレスチナの中でも影の存在だった。しかし、２０００年代になってオスロ合意が崩れ、和平への希望が潰えた時、それまで影だったハマスは、パレスチナ人の間でイスラエルに対抗する希望を与える存在となった。そういったことは、欧米や日本では一般的に理解されていない。

私と中東との関わりは、大阪外国語大学（現・大阪大学外国語学部）でアラビア語を専攻したことに始まる。そもそも、なぜ大学受験でアラビア語を選んだのか、と繰り返し質問を受けてきた。高校生の時にフランスの作家カミュの小説『異邦人』や『ペスト』などにはまり、大学の第１志望はフランス文学だった。当時、国立大学二期校だった大阪外国語大学のアラビア語科を第２志望に選んだのは、『異邦人』の中で主人公に「太陽がまぶしいから」と銃で撃ち殺されてしまうのがアラビア人だったからである。アルジェリアを舞台としたカミュの作品群の中で、アラビア人は常に影のような不気味な存在だった。当時の私の気負いから言えば、アラビア語を学ぶことは、カミュの世界を、その影の側から見ることだった。実際に、高校生の時は欧米の世界しか知らなかった私を、アラビア語は「世界の影＝裏側」へと向かわせ、ジャーナリストとして中東を歩き回らせることになった。これまで世界、特に欧米や日本から影の存在とみなされてきたハマスについて書くことは、アラビア語を学ぶという10代の選択が当然、

行きつく先という気がする。

本書では、事実に基づいて記述しつつ、できるだけパレスチナ人とハマスの側から世界を見ようとした。ハマスの指導者やメンバーは何を考え、パレスチナ民衆はなぜ、支持するのか。私の取材体験やインタビュー、さらに中東のメディアで流れている多くのインタビュー動画などを参考にして、生の材料からハマスの実像を探ろうとした。特にハマスに関わっている人間の声や体験を描くというジャーナリズムの方法を意識した。

10月7日の越境攻撃の後、イスラエルの大規模空爆が始まって連日のニュースになるまで、日本ではハマスについてのまとまった書籍はなく、ハマスの実体を解明しようとしたリポートや研究書もほとんどなかった。しかし今回、改めて資料を読み、アラビア語の多くのインタビューを聞いて、ハマスという組織はこれほど饒舌（じょうぜつ）だったのかと驚いた。ハマスに関する材料がないのではなく、ありすぎて途方に暮れる思いだった。

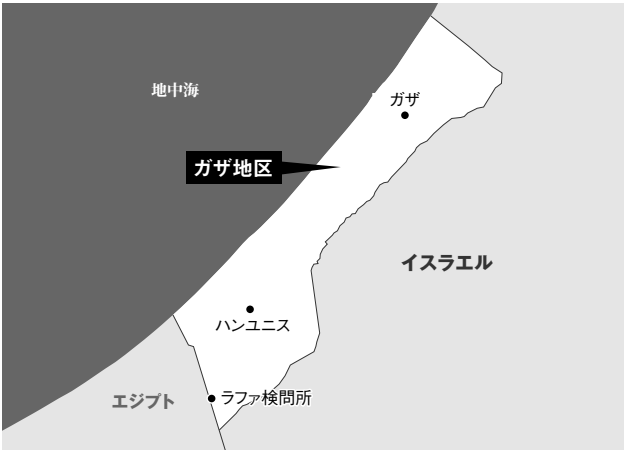
ハマスには政治部門と軍事部門があり、政治部門にもガザや西岸のパレスチナにいる政治リーダーと、パレスチナの外にいる政治リーダーがいる。さらに、イスラムの教えに基づいて貧困救済や孤児救済を行う社会慈善組織がある。一口にハマスと言っても、いくつもの顔がある。それぞれの部門が、それぞれの視点から主張する。

まだ分からないこともたくさんあるが、ハマスという組織を知ることで、パレスチナ問題の現実や、イスラエルの占領下にあるパレスチナ人の困難が見えてくることは明確に分かった。これまで日本人の多くには見えていなかったハマスという存在を知ることで、パレスチナ問題への理解が進むことを期待したい。

広域図

レバノン
ダマスカス
地中海
シリア
ヨルダン川西岸地区
テルアビブ
エルサレム
アンマン
ガザ地区
ガザ
死海
イスラエル
ヨルダン
エジプト
シナイ半島
サウジアラビア

ガザ地区拡大図


地中海
ガザ
ガザ地区
イスラエル
ハンユニス
エジプト
ラファ検問所

【ハマス関連年表】

1936年―39年	アラブ大反乱（パレスチナのアラブ人による反英・反シオニズム反乱）。 エジプトのムスリム同胞団がパレスチナに進出。
1947年11月	国連総会でパレスチナ分割決議の採択。アラブ人国家とユダヤ人国家に分割する。
1948年5月	イスラエルの独立宣言の翌日、アラブ諸国の宣戦布告。 第1次中東戦争（イスラエル側は独立戦争、アラブ側はナクバ〈大破局〉）の勃発。
1948年12月	パレスチナのアラブ人70万人が難民化。 国連総会は難民の早期帰還と、帰還できない場合の補償を求める国連総会決議194を採択。
1949年	イスラエルとエジプトなどアラブ諸国の間で休戦。 ガザはエジプトの統治、ヨルダン川西岸と東エルサレムはヨルダンの統治となる。
1952年	エジプトでナセル大佐率いる王政打倒クーデターが勃発。54年からムスリム同胞団を弾圧。
1965年	アラファト率いるファタハが正式に発足。ガザの同胞団メンバーが主力に。
1967年	第3次中東戦争で、イスラエルがガザとヨルダン川西岸、東エルサレムを占領。 国連安保理がイスラエルの占領地からの撤退とアラブ諸国のイスラエル承認を求める決議242を採択。
1977年	イスラエルの総選挙で、右派リクードが中道左派労働党を破って政権を発足。

1979年	エジプトとイスラエルが平和条約締結。77年、サダト大統領のエルサレム電撃訪問後、米国仲介のキャンプデービッド合意から締結につながった。
1980年	ガザのムスリム同胞団メンバーが「パレスチナ・イスラム聖戦」を発足させ、除名に。前年79年のイラン・イスラム革命に触発されたもの。
1982年	ガザのムスリム同胞団が武装闘争に入る方針を機関決定。責任者は政治局長のアフマド・ヤシーン。この年、イスラエルがエジプトにシナイ半島を返還し、半島にあったユダヤ人入植地8か所が解体され、その入植者がガザに移った。
1984年	ヤシーンが武装闘争のための武器調達によってイスラエル軍に拘束され、服役。85年に捕虜交換で釈放。
1987年11月	ヤシーンがイスラエル軍と戦う軍事組織「パレスチナ・ムジャーヒドゥン（ジハード戦士）」、パレスチナ人のスパイを摘発する治安組織「アルマジド（栄光）」の設立を決定。
1987年12月	第1次インティファーダの始まり。直後に、パレスチナのムスリム同胞団が「イスラム抵抗運動＝ハマス」の発足を決定。
1988年8月	ハマス憲章を発表。
1989年2月―5月	ヤシーンの指揮下で、軍事組織「101部隊」がイスラエル軍兵士2人を殺害。ヤシーンもイスラエル軍に拘束され、終身刑の判決を受ける。
1991年	ハマスの軍事組織イッズディン・カッサーム軍団が発足。

１９９２年	アブマルズークが海外組としては初めて政治局長に選出。
１９９３年９月	イスラエルとＰＬＯがパレスチナ暫定自治協定（オスロ合意）に調印。
１９９４年４月	カッサーム軍団による初めての自爆テロ。 ２月のヨルダン川西岸ヘブロンでの入植者の銃乱射事件への報復とした。
１９９４年５月	オスロ合意が実施され、ガザとヨルダン川西岸の都市エリコでパレスチナ自治開始。
１９９５年	イスラエルのラビン首相暗殺。
１９９６年	イスラエルの首相選挙でリクード党首のネタニヤフが首相に選出。
１９９７年	ヨルダンでのハマス政治局長ハーリド・メシャアルの暗殺未遂事件。 ヤシーンの釈放とガザ帰還。
２０００年９月	リクード党首シャロンのイスラム聖地への立ち入りに対する反発から第２次インティファーダが勃発。
２００４年３月	イスラエル軍がヤシーンを暗殺。このころハマス幹部の暗殺相次ぐ。
２００６年１月	ハマスがパレスチナ自治評議会選挙に参加、過半数の議席を得て勝利。 ３月にハマスによる自治政府内閣が発足。米・ＥＵ、国連は認めず。

２００７年６月	ハマスの軍事部門がガザのファタハを排除して、ハマスのガザ支配が始まる。 イスラエルはガザの封鎖を始める。
２００８年12月―09年１月	イスラエルの大規模ガザ攻撃。１４１７人死亡。
２０１１年	民主化運動「アラブの春」でエジプト、チュニジア、リビアなどの強権体制が倒れる。 エジプトでは民主的選挙で同胞団系政権が生まれる。
２０１３年	エジプトで軍クーデターにより同胞団政権が打倒される。
２０１４年７月―８月	イスラエル軍によるガザ攻撃。２２５１人死亡。
２０１７年	ハマスが新政策文書を発表。１９６７年ラインでのパレスチナ国家を支持。
２０１７年	トランプ大統領がエルサレムをイスラエルの首都と認定。 18年５月に駐イスラエル米大使館をエルサレムに移転。
２０１８年３月	ハマスがイスラエルへの難民帰還を求めて、ガザでのデモ「帰還の大行進」を始める。
２０２１年	イスラエルによる11日間のガザ攻撃で２５６人死亡。
２０２３年10月	ハマスのカッサーム軍団による越境攻撃。 その後、イスラエルによるガザへの大規模攻撃。